

明治四十一年小樽 藤田南洋日記より

(四月) 十五日 水曜日 晴れ(美文「旅役者」を送る)

路は大方ぞうり路となりぬ。朝野田より来葉。

夜八時頃、秋の月の如な光に照らされて、紅花と啄木先生を訪ふ。先生といふも何だか馬鹿にしてゐるようだが、兎に角啄木さんは例に依つて例の元氣。地球のはづれにおしとめられるように感ぜられて、堪らなくなったので、逃げて来た、二三日中に上京して、一つ奮つて見る覚悟だ、家内は函館へ置いてゆくつもりだと、いはれた。

それから釧路の話をされる。北海道人の特色をとかれる。文学談をやる。政治。哲学。遠く海賊の話に迄とんだ。其時はもう大分おそかったが、それより鏡花の神秘小説にうつつて、草迷宮を読まれた。種々な話の中で一番うれしかった事は、原稿ができたなら紹介して下さいと云つた事であつた。これがお分れだからといって引止められて、赤飯をよばれ菓子を饗ばれ、帰つたの二時過先生と奥様は玄関迄送つてこられた。

(中略)

(五月) 十六日 土曜日

昼過ぎ信文堂へよつたら、文章世界も秀才文壇も来てゐる。秀才文壇を見ると驚くではないか!

『酒』といふ小説が乙賞をとつてる。

『夢日記』が佳の次に出てゐる。

其次に森野君が『あゝ藤田君』といふのを出してゐる。自分は心もひっくり返るばかり、紅花君のもとへ駈けつける。紅花君もびつくり。吉田君はうまいといつた。

(中略)

(六月) 十一日(木曜日) 紅花君から借りた小栗風葉の「天才」夕方から読み出して、日が暮れて了つた。

『天才』は著者自身も言つてゐる通り、慥に著者の態度作風に於て、一機転をなしたもので、根底が深く人生に触れて居る。筆も円熟の境へ入つたとも云ふのであらうが、未だ幾分の色氣——優れた独特の技工はあるが、臭味が大ぶとれたのは何より愉快に感じた。近来会心の作に接した。

十五日(月曜日) 晴又曇

此頃はカツと許り急に暑くなった。海へ入つてゐる人も決して珍しくなくなつた。

韓国の紀堂君から手紙がくる。高田君と五百枚張り込んだ、原稿紙がくる。二百五十枚つゝだ。出東恐し。夜吉野ではない、大倉君から「羈文粧」かかりて、一二枚よんでみたが、頗る気に入つた。十六日(火曜日)曇 秀文と文章世界くる。秀文に自分のオカシな面が載つてゐる。新体詩「鉄の鍵」が丙賞で、美文の『旅役者』も丙賞を得た、うれしい事はうれしいが前のその様にそれ程うれしくない。文世の写生文は敢へなくも没書を喰つた、忌々しい。

夜、大倉君と余と紅花君と湯へ入る。上ると自分の大前五拾銭程出して、張り込んだ下駄が無い、癪にさはって仕様が無いが、仕方が無いので、湯から、古びた女下駄をかりて、からくと三人で酒井君を訪問した。下らぬ浮かない話に卅分を費して、二人に分れ、自分は、山田町の家へ行く。



『秀才文壇』8巻13号(明治41年6月)より

